

# 須田輝洲 洋画家

---

須田輝洲は精緻な描写力で、明治から昭和にかけて活躍した洋画家ですが、その生い立ちや経歴について不明な点が多く、その全貌は明らかになっていません。しかし、興風会で2点の作品を所有することから、須田の作品を研究する方々にご協力をいただいて調べた結果、ある程度の略歴も分かってきました。

須田は、1865(慶應元)年生まれ(出身は茨城とも埼玉とも)、1883(明治16)年ごろ上京して医学を修業、1885(明治18)年、医術開業試験前期試験に合格しますが、同年に展覧会で見た床次正精の絵画に感激して志を変え、画家になるべく千駄木大保福寺(廃寺現駒込学園)に居住していた床次正精(1842~1897)に入門。この時、その息子で政治家の竹二郎(1867~1935)とも出会います。

床次正精(1842~1897)は、薩摩(鹿児島県)出身。本姓は児玉といい、幕末に長崎で油絵に接して以後、独学で洋画を学びます。維新後は、司法省検事、判事として勤務の傍ら作画し、グラント将軍、伊藤博文らの肖像のほか、日光の名勝図、帝国憲法発布の式場・祝宴図などを描きました。

また、正精の息子の竹二郎は、1890(明治23)年帝大卒業後、大蔵省、地方局長、鉄道院総裁などを歴任し、1914(大正3)年立憲政友会から衆議院議員となり、



「長瀬の紅葉」と題された作品



輝洲の作品は描かれて90年以上の時を経ての公開となりました

1931(昭和6)年、犬養内閣で鉄道大臣となりましたが、犬養首相の後継総裁の座を鈴木喜三郎と争って敗れました。

一方、画家に転職した須田は、1893(明治26)年、第5回明治美術展に出品。以降、明治美術会などの展覧会に作品を出品しますが、1904(明治37)年、乃木將軍に直訴して従軍画家として日露戦争戦地に赴き、凱旋後「従軍画家としての日露戦役」の講演を全国で行い好評を博します。記録によれば、少なくとも1900(明治33)年には東京麹町2丁目10番地に、1930(昭和5)年は原宿170ノ19に居を構えていたようです。須田の没年は定かではありませんが、1938(昭和13)年に床次竹二郎伝の編集にあたり、74歳であったことが判明しているので、没年はそれ以降です。

当会に残された須田の絵画は2点あり、両者とも1931(昭和6)年4月に受け入れた、という記録が残っています。1点は30円で購入しており、もう1点は「須田輝洲画伯ヨリ寄贈」とあります。しかし受入れの経緯が残念ながら不明です。もしや、その前年の1930年6月11日、当会館へ犬養毅元内閣総理大臣が講演会を行っていますが、犬養内閣時代に鉄道大臣で入閣していた竹二郎が関わったのでしょうか。

[参考資料] 『興風会館物語－醤油の町のロマネスク』山本文男・財興風会・2005年12月20日発行／『近代日本人の肖像 床次竹二郎1867～1936』[協力] 佐々木征氏(あーと・わの会監事)、茂木幹夫氏